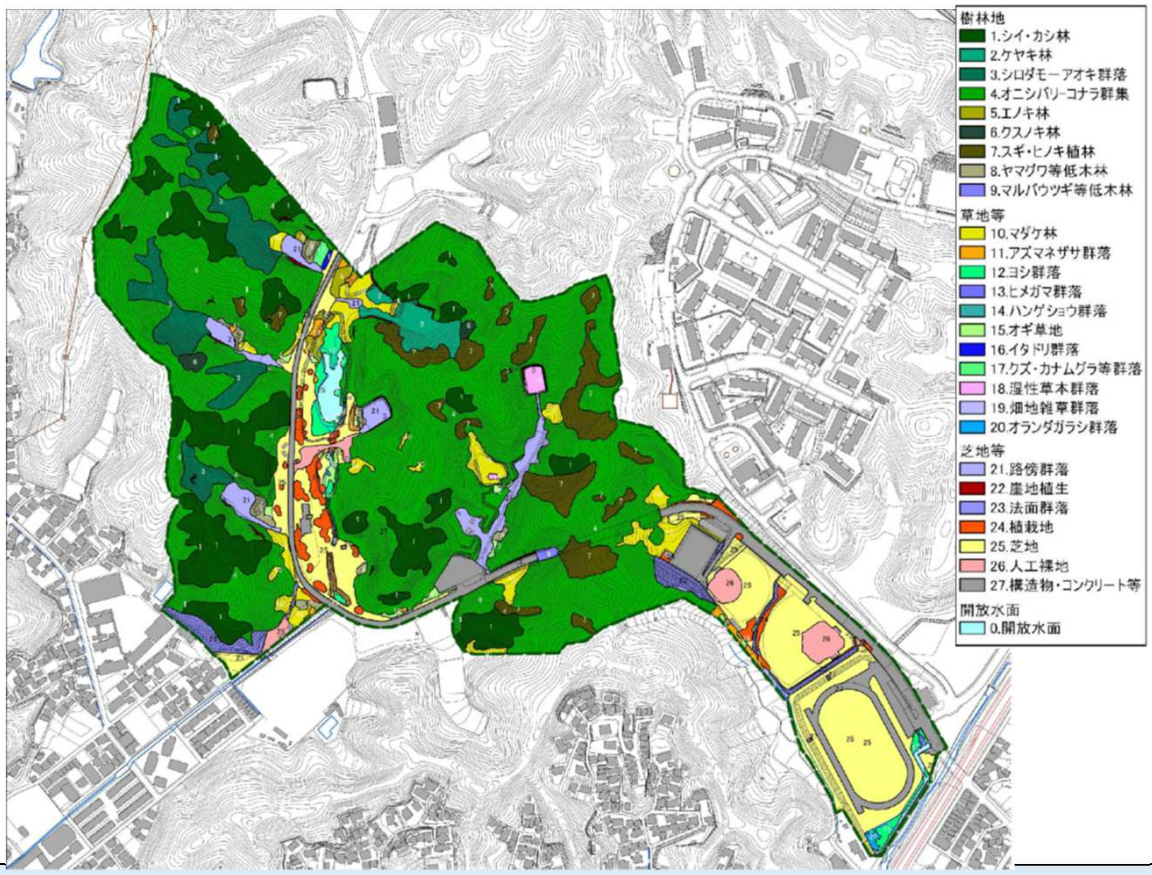
7　発達した森林と多様な植生

場所・範囲



■作業スケジュール

作業	頻度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ツル切り・伐採・裾刈り									■	■	■	■	
除草	隔週、ローテーション	■	■	■	■	■	■	■					

保全管理

自然環境の特徴	2020年度には新種と思われる桜が神奈川植物誌の調査で発見されているが、新種の登録はしていない。 手入れをしていないため、極相林に向かっている。 かつてはクロマツ林、カヤト（カヤ場）が豊富にあった。
利用・管理状況	・森林の手入れは特にしていない。散策路や園路周辺の危険木のみ対応している。
保全の目標	全てを極相林にするのではなく、部分的に里山管理（コナラ林➡薪、杉林➡木材として活用）を行うことで、多様な植生をパッチ状に保全する。

管理の方針	・新品種の桜は系統保存する。ブランド桜としてまちおこし的な記念植樹を進める。植樹地としては、久木分岐点のマダケ林を除去して行うのが望ましい。 ・マダケ群落は、群落前線を純群落域まで押し戻し、群落内部は太いものを優先的に残す形で低密度化する。現在10本/㎡程度であるが、将来的には3本/㎡程度にし、発生材は各種ワークショップで活用する。対象群落は2200㎡以上である。 ・階層構造が適当な安定的なタブノキ、スダジイ林はそのままにし、極相林、鎮守の森的に保存し、景観的にはメインの森とする。 ・コナラ林は区画を決めて輪伐し、若齢林主体とすることでアカシジミ等の昆虫類の生息環境を確保する。ナラ枯れ病罹患前のコナラも積極的に伐採し、伐採後は下草刈りをして萌芽が適切に成長するように補助する。伐採した木は薪として活用する。 ・スギ植林跡地は伐採、製材により活用する。伐採跡地は、かつてあったクロマツ林やカヤトの創出を検討する。 ・先駆樹種の優占する緩傾斜の斜面林の一部を除伐しカヤトとして再現する。単なるススキの純群落というだけではなく、ギンイチモンジセセリやカヤネズミなど近年まで池子の森に生息していた種の生息環境として復元する。カヤトの整備は11～1月に全面を刈り取る。 ・斜面林で伐採対象となる高木は5本/100㎡程度であると思われるが、1本で薪を10回分程度取ることができる。デイキャンプの運用と調整して整備面積を定める必要がある。 ・シロダモ、アオキ群落は、項目４の復元湿地候補地とする。 ・枝谷戸の谷底面や山裾では、全面を同一時期に刈り込むのではなく、一部をパッチ状に残しながら時期をずらして刈る。パッチに設定した部分も永遠に手つかずにするとパイオニア樹木が優占するため、周囲よりは低頻度で刈る。
その他	